

ホーウェイス夫人著『美しい装いの芸術』

助教授（西洋服装史担当）能澤慧子

図書館便りNo87の「稀観本50」において、メリーフィールド夫人の『芸術としての服装』を紹介したが、今回取り上げるホーウェイス夫人の『美しい装いの芸術』（595-H）Haweis, Mrs. H. R. “The art of beauty” London, 1878もまた、衣服、髪型、履物、装身具及び室内装飾を総合的な一つの芸術として捉えながら、流行に流される当時の女性への批判と教育を試みた著作である。

本書は、『セント・ポール・マガジン』誌に何回かにわたって載せた原稿をもとに編集されたものであり、四つの章から構成されている。第1章「美と服装」、第2章「美と頭飾」、第3章「美と環境」、第4章「乙女の苑」という章題から想像されるように、服装、頭飾、環境つまり住居、室内装飾が女性の美しさの演出の点で、同等に扱われている。

著者はまず、女性にとって、外見の美は必要不可欠であり、無上の価値を持つものであると主張する。そしてそれを軽んじたり、無視してはならないが、豚の鼻に金を塗っても、豚は所詮豚にすぎないのと同じで、それは内なる精神の洗練を伴わねばならないとする。

次いで「美」とは何かについて考察し、ダーウインの『種の起源』を引用して、美人の概念は種族の慣習によって千差万別であるという彼の説に対する疑問を洩らす。そしてもう少し抽象的な美人の論理を求めようとしている。

そこで彼女は歴史上の様々な服装を顧みて、自分自身の服装の美の原理を打ち出す。一つは、身体の自然な形を隠したり、変形させないこと、いま一つは、適切な範囲で、着る人の個性を表現することである。そしてこの意味で、彼女はギリシ

ヤ、ローマ、及び中世の服装を高く称揚し、ことに中世末期のコットとシユールコの持つ、豊かかつ自然らしさを損わない装飾性と、女性の身体的特徴の自然な表現性について、詳しく述べている。そして逆に、コルセットや腰枠で著しく身体の形を歪曲させたとして、エリザベス I 世時代や18世紀および19世紀半ばの服装を批判している。

また仕立屋、帽子屋などの勧めるままに、モードに従うことで、他人といつも同じであろうとする姿勢をいましめ、常に自分に何が最も良く似合うかを研究せよ、と唱えている。

全編に流れる中世への傾倒と自然主義及び19世紀ブルジョワ的モードへの批判的態度には、ウィリアム・モリスやラファエル前派の影響が強く感



□絵：原画は著者による色刷り木版画

じられる。実際、この著者はことにロセツティの作品を愛好し、後年、彼のかつての住居を借りて住んだほどである。美貌の規準は決して普遍的ではなく、美意識の変化によって移ろうものであり、個性を重んじ、磨くことによって、醜いあひるの子も白鳥になり得ると主張する本書第4章の文章が、この著者の美感の源泉を暗示している。

「モリス、バーン・ジョーンズ、その他の人々が、かつては文字通り嫌われたある種の顔や姿を、流行としてしまった。赤毛——かつてはそうした女性は社会的暗殺を意味した——がいまでは熱烈に迎えられている。突き出た唇の蒼白い顔は憧れとなり、緑の目、ひそめた眉、白っぽい褐色の肌色にも人々は冷淡ではなくなった。実際、ピンク色の頬の人形のような顔はもう見られなくなった。そうした顔は『個性が無い』と言われ、きれいな小さな手もまたしばしば同様である。」¹⁾

さて、著者ホーウェイス夫人(本名メアリー・エリザ・ホーウェイス Mary Eliza Howais 1848~98)について、その伝記に基づいて、少々



著者 Mrs. H. R. Howais 40歳頃の写真

紹介しておこう。彼女は一時は相当名の通った肖像画家の長女として、ロンドンに生れた。父の影響により、幼少より絵と文学に親しみ、何ら正規の教育を受けることなく、それらの分野を専門家のレヴェルまで修得した。また室内装飾への並々ならぬ関心は、すでに10歳の頃のドールズ・ハウスの遊びから芽生えていた。10代の頃は中世の彩飾写本に関心を寄せ、大英博物館に通って、その研究に励み、本の装幀とさし絵を学んだ。彼女の中世への傾倒は、以後、終生変らぬものとなった。

18歳で結婚し、1875年から、自らの子供達の家庭教育用教材を目的として書いた『子供のためのチョーサー』は1877年に出版されたが、その平明な文体と懇切な注釈、及び見事な木版のさし絵によって評判となり、彼女の名声を一躍高めた。

他方彼女は自分の住居の壁を自ら塗り直したり、ドレスや頭飾をアレンジして、上流社会の人々を感服させる実践家でもあった。本書も、その著述には厳密な意味での論理性がしばしば欠けはするものの、彼女の、時にはユーモラスな、時には優美なさし絵と、実践を踏えた美へのアプローチの手法が溢れていて、読者を魅きつける。

こうした経歴を持つこの著者の態度は飽くまでも唯美的であって、その意味で、87号に紹介したメリーフィールド夫人とはまた立場が異っている。メリーフィールド夫人がブルーマー服を称揚したのに対して、ホーウェイス夫人はそれを「美」と認めない。そして「合理服協会」⁴⁾加入の勧誘をも退けたのであった。

注1) 本書 p.274

2) Howe, Bea "Arbiter of elegance", London, 1967 (298-H)

3) doll's house 19世紀に流行した玩具の一種。家屋のミニチュアで、中に小型の人形を置いたり、家具、調度品を整えて楽しむもの。

4) Rational Dress Society 1881年にハーパート夫人によって設立された協会で、健康と合理性の観点から、服装を改良しようと試み、とくに女性のズボン型の衣服を奨励した。